

グローバル化を 地図と資料で捉える

東京国際大学教授

高橋 宏

グローバル化の動きを捉える

今日の世界では、グローバル化（Globalization）の言葉が示すように、国境を超えたさまざまな動きが活発に展開されていて、しかもそれらが多角的な結びつきをもっています。このようなグローバル化の動きは、もちろん経済活動でも進んでいますし、芸術・文化、科学技術、政治などあらゆる側面で急速に広がりを見せています。近年ではとくに、IT革命により情報技術・通信の発達がさまざまな分野でモノ・カネ・ヒト・技術・情報などの国境を超える流れを加速化しています。

これまで、こうした国境を超える交流は、たとえば日本とアメリカや中国など諸外国との関係として展開されてきました。このような従来の交流は、国家間の関係として生じるもののがおもなものでした。つまり、「国際」関係の発達として、一つの国と他の国との間の動きが主流であったわけです。しかし、20世紀の後半からは、国境を超える交流が多面的な展開を見せはじめ、とくに情報技術と通信の発達によって、一度に多くの国を巻き込んだ国際交流を可能にしてきました。これは、もはや「国際化」ではなく、まさに「地球化」の動きであり、言い換えると「全球化」「グローバル化」と呼ぶべきものです。

このようなグローバル化の動きを的確に捉えるためには、文章での説明や詳細な数値によるデータの提示が重要ですが、しかしそれらのみでは、複雑な現象を分かりやすく捉えることは難しいも

のです。有効な方法は、抽象的な現象を模式化して示したり、複雑で細かなデータを簡明に図などで表示したり、ビジュアル化を行うことであり、それによって、理解を助けることがきわめて重要なことがあります。とりわけ、地球上には多数の国や多様な地域があるので、言葉による説明を、地図や図表などによって補完的に提示することが不可欠です。むしろ、ビジュアルな説明を主とし、文による解説などを従としたほうが、はるかに分かりやすくなります。

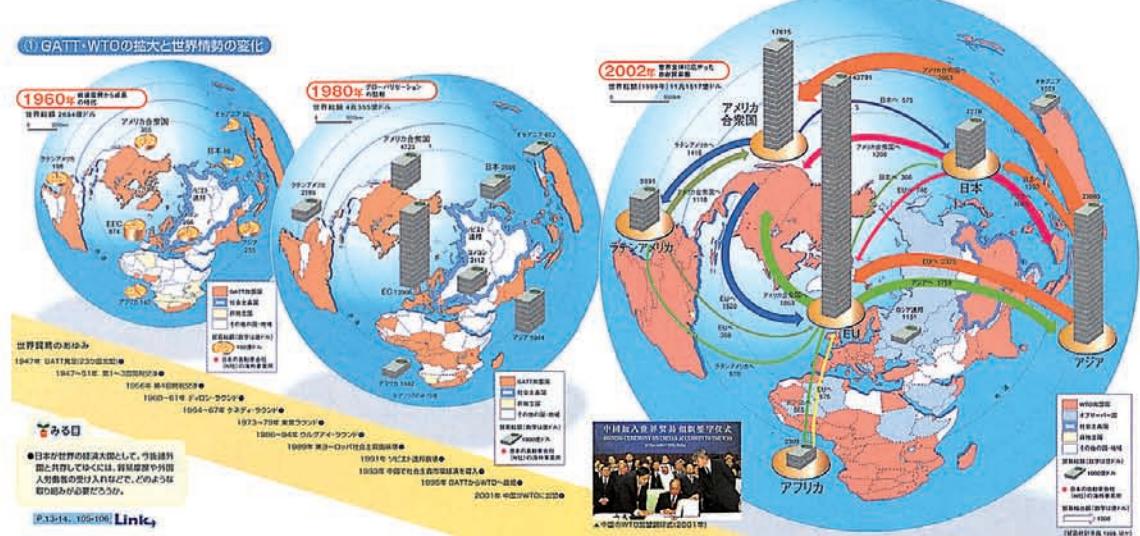
大学の授業でも、また大学院の講義や演習でも、こうしたことは当てはまります。ビジュアルな説明は、文章での説明を不要にしたり、取って代わったりするものではなく、あくまでも私たちの理解を助けるためのものであり、文章の解説を引き立たせるためのものです。しかし、地図や図表などによるビジュアルな説明を心掛けると、文章それ自体も分かりやすい表現となることが多いのも事実です。

地図帳でグローバル化を的確に理解する

そこで、「グローバル化」を言葉で説明するよりも、次の図を見てみましょう（次ページ）。

この図は、世界の主要国・地域の貿易総額を1960年、1980年および2002年の3か年について示しています。また、戦後の世界貿易を制度的に推進してきたGATT・WTOの加盟国の動きや、植民地から独立した国の変化や、社会主義陣営の変化を示しています。その他に、日本の自動車会社（A社）の例を挙げて、企業活動のグローバルな展開がどのように進んできたかも明らかにしています。

これらから明らかなことは、（1）世界の貿易額が急拡大を遂げてきたこと、（2）その要因の一つとして世界の自由貿易体制が拡大したこと、また（3）もう一つの要因として、企業活動のグローバル化が進んだことにより、それに伴う経済活動のグローバルな展開と貿易額の増大とがもたらされたと考えられること、以上があります。図から分かるることはこれら3点ですが、その他に、どのよ



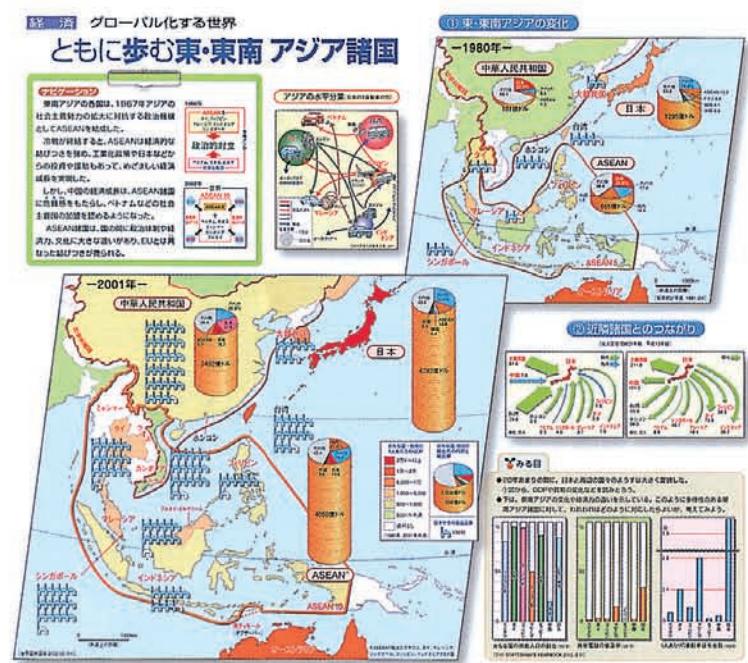
帝国書院『標準高等地図 新訂版』

うな要因があったと考えられるか、学生・生徒に問題提起を行い、自分たちで調べるように促すことにより、積極的な学習を引き出すことができるものと思います。

関連資料を他のテーマからも探す

とくに、グローバル化の視点から重要なことは、貿易の流れをもう少し細かく眺めてみることです。このように、貿易の総額の流れをもう少し細かく検討するために、同じ地図帳の21～22ページ（右図）を見ることにします。そうすると、政治経済体制の変化が地域の貿易に大きな影響を与えることも分かりますし、貿易の流れ自体が、完成品を輸出・輸入しあうものから、部品や半製品の貿易が重要性を増していることも分かります。具体的に見ると、一例として、東南アジアにおける自動車の「水平分業」の流れが分かります。自動車は極めて多数の部品から

成り立っていますが、現在ではそれら部品をすべて一つの国で生産し、それらを同じ国で組み立てて完成車を生産するということは一般的ではありません。むしろ、いくつかの国でそれぞれ異なった部品を生産し、それらを別の国で組み立てて完成車を生産し、しかもその完成車を多数の国に輸出する这种方式が一般化しつつあります。



帝国書院『標準高等地図 新訂版』

そのうえ、部品の素材となる鉄鋼やその他の金属、ゴム・プラスチックなども、貿易によって調達されていますし、さらにたとえば鉄鋼の原料である鉄鉱石・石炭などの資源も貿易によって入手されるものです。これらの複雑な生産活動を、地理的に最適な場所を選んで実施していくことが、世界的な競争に直面している企業にとってはきわめて重要なことです。要するに、生産から消費に至る一連の経済活動の流れが、いまやグローバルな視点からの立地・流通・販売へと移ってきてているのです。

少し進んだ分析を試みる

また、貿易の流れをさらに異なった視点から捉え、原燃料・食料などの貿易額と完成品や部品などの貿易額がそれぞれ占める比率が、長期的にどのように変化してきたか確認してみると、上ののような貿易の変化をさらによく理解することができます。具体的にいうと、日本の通商白書や国連の貿易統計データなどから、貿易商品のシェアが長期的にどのように変化してきたかを見ることにします。そうすると、原燃料や農産物・食料あるいは素材などのシェアが低下し、代わりに工業製品、とくに機械類のシェアが大きく増大してきたことが分かります。つまり、2国間で貿易される商品の比重が低下し、多角的に多くの国で取引される商品の割合が増大してきたのです。

さて、ここで先に述べた「企業活動のグローバル化」についてもう少し詳しく見ましょう。これは、まさに企業の立地をどこで行うか、生産・流通・販売などの視点から最適化を目指す企業活動によって推進されています。交通・通信・情報記述の発達により、世界の市場が一体化を遂げつつあることがその根底にあります。企業の生産活動がグローバル化すれば、当然ながら、流通・販売もグローバル化します。

このようなグローバル化を捉える指標として、「海外直接投資によって投下された資本ストック（資本設備）が国内総生産に対してどれくらいの

割合を占めているか」を見てみましょう（下図）。

これによると、1995年から2000年にかけて、各国の国内生産の中で外国資本の占める比重が急速に高まったことが分かります。90年代半ばまでは、世界全体で10%以下であったものが、2000年以降には20%を超えていました。それだけ、外国資本の働きが大きくなっています。

それを先進国と途上国で比較すると、とくに2000年代の途上国では外国資本の役割が3分の1を超えるまで拡大しています。



(UNCTAD, World Investment Report, 2002 および 2003 より作成)

以上のことから、グローバル化しつつある企業活動が、経済のグローバル化の重要な要因であることが分かります。

経済のグローバル化には、プラスとマイナスの相反する評価があります。積極的な評価は、グローバル化が「世界的な資源配分の効率化」と「経済厚生の向上」に資すると判断されるからです。しかし否定的な評価は、先進国による途上国の支配と途上国住民の貧困化に繋がり、地球環境の破壊も悪化が進むと考えられるからです（『標準高等地図 新訂版』p.113~114）。

ここに見てきたように、地図帳を上手に利用することにより、学生・生徒に具体的で分かりやすい説明を行うことが可能となります。そのうえ、こうした図やグラフを基に、関連する資料を調べることによりさらに詳細な分析を行い、専門的な視点からの議論を展開することができるようになります。